「北海道の色彩ポイントブック」
– 北海道および積雪寒冷地の道路施設の色彩検討の手引き –

国立研究開発法人土木研究所
寒地土木研究所
Civil Engineering Research Institute for Cold Region
http://scenic.ceri.go.jp
011-590-4044
scenic@ceri.go.jp

北海道の道路環境・景観は、本州以南の地域や非積雪寒冷地とは大きく異なり、道路附属物等の色彩選定にあたっても独自の考え方で取組む必要があります。

「北海道の色彩ポイントブック」は、北海道における道路附属物等の色彩検討に際して、現状の課題を確認するとともに、そのポイントや留意点を整理したものです。また、平均的な北海道の道路環境を想定した際に適合の可能性が高いと考えられる色彩を推奨色として提示しています。

本資料は、地域景観チームのウェブページからダウンロードできます。

ダウンロード >> http://scenic.ceri.go.jp/manuals

色彩検討に際して考慮すべき北海道の道路環境特性

広大で開放的な景観（事例:長沼町内）

冬期の雪景色（事例:黒松内町内）

1) 広大で開放的な景観
北海道では、ゆるやかな地形、規模の大きな土地利用、農地や牧草地、それらを貫く直線的な道路などの要因により、スカイラインが低く、見通し距離が非常に長くなっています。このため、特に背の高い道路附属物等は、空や遠方の山なみを背景として見られることが多くなります。

2) 冬期の雪景色
白銀の世界と言われるように、冬期積雪のある地域では一面が明るい無彩色の景色となります。

3) 冬期の気候に対応するための多数の道路附属物
冬期積雪期に対応するため、非積雪寒冷地に比較して非常に多くの道路附属物等が設置されています。また、積雪関連の荷重に対応するため、強固な構造が採用されています。

4) 除雪等に起因する道路施設の劣化
除雪機材の接触、除雪時に飛ばされた雪氷や防滑剤の衝突、融雪剤の影響などにより、構造物に劣化や損傷が多く発生します。

こげ茶系(5YR3/1)の塗装がはがれ、下地の亜鉛めっきとの差が目立って見える事例

多数の道路附属物

主な提案

❶ こげ茶(ダークブラウン)は北海道の環境に必ずしも適合しない。
北海道の広大で開放的な景観、冬の雪景色を考慮すると（右枠外も参照）、道路まわりの構造物は空や雪などの明るい背景を背にして眺められるケースが少なくありません。そのようなケースでは、こげ茶のような暗い色は背景から際だって見えます。

また、冬の無彩色の雪景色の中では、こげ茶でさえ鮮やかさを感じる色となります。

ダークブラウンの標識柱が開放的な景観を損ねている事例。より太いはずの電柱よりも目立つ。

色彩シミュレーション。左の亜鉛めっき仕上げ(実物)よりも、右のこげ茶系の色彩(フォトモンタージュ)のほうが、照明柱や防護柵が目立って見える。

❷ 景観3色では無彩色のダークグレーが優位。場合によっては亜鉛めっきも。
冬の雪景色（無彩色の景色）において目立たず、景観に融和するのは無彩色であり、景観3色の中ではダークグレーが唯一となります。無彩色であれば夏の鮮やかさを取り戻した環境にも問題なく融和するほか、右記の塗装の損傷による問題も緩和されます。

したがって北海道の道路では、ダークブラウンよりもダークグレーを優先して検討するべきと言えます。また、明るめの無彩色が適合する環境では、亜鉛めっき仕上げも選択肢になります。

ダークグレー 10YR3/0.2（景観3色/4色）
照明柱； 国道230号 定山渓

❸ 緑系のグレーという選択肢。
空や雪、遠景の山並みなど、北海道において背景となる要素には、青みよりの色彩のものが多くなります。このことを考えると、北海道の環境には、赤みよりの茶系などの色彩よりも、青や緑よりの色彩が適合すると考えられます。

実際に、緑系のグレー（彩度1.0程度）が採用された優れた事例が道内で複数確認できています。

緑みのグレー(美笛グリーン) 5G4/0.8程度
高欄； 国道453号

青緑みのグレー 5BG5/1
照明柱； 旭川市 北彩都地区クリスタル橋

暗い黄緑みのグレー 5GY3/1
照明柱･標識柱； 道道140号 愛別町東町

★解 説

全国版ガイドライン：「景観に配慮した道路附属物等ガイドライン」
国土交通省／道路のデザインに関する検討委員会；2017

2017年に、それまでの「景観に配慮した防護柵の整備ガイドライン」を拡充改訂するものとして策定された、道路附属物等に求められる景観上の配慮事項を示したガイドライン。色彩に関する具体の記述があるのは国土交通省系の技術資料で唯一。

景観3色（4色）：ダークグレー、ダークブラウン、グレーベージュ
2004年3月の「景観に配慮した防護柵の整備ガイドライン」において、景観に配慮する場合に基本となる色彩として示された3色。防護柵に限らず屋外で用いられる建設資材製品の多くにこの3色が採用されるようになり、広く普及が進んでいる。

これら景観3色にはマンセル値の目安が示されており、ダークグレー：10YR3/0.2、ダークブラウン：10YR2/1、グレーベージュ：10YR6/1。色相は10YRに統一されている。

上述の2017年のガイドラインで、オフグレー：5Y7/0.5が追加されて4色となったが、オフグレーの普及はこれから。

全国版ガイドライン(書籍版)に付属の景観4色の色見本

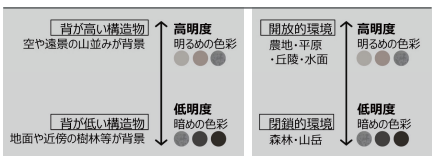
環境色・茶色・こげ茶：
環境に調和する色彩とされ、2004年のガイドライン以前から、国内で広く使われていた茶色系の色彩の通称。ただし、国立公園の管理計画等でも「茶色」とだけ記述されているように、具体の色（マンセル値）は指定されていなかったため、赤っぽい茶色から、明るい茶色、暗めの茶色までさまざまなものが混在する。概して、上記景観3色のダークブラウンよりも赤み寄りで明るい茶色が多い。

もともとは樹林の中などで使われることを意識して設定された色と言われる。

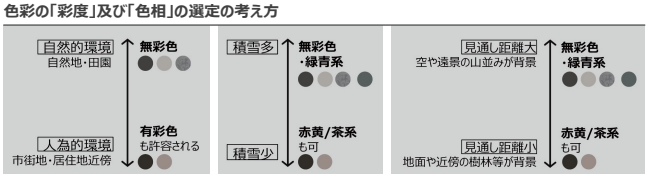
色彩選定の考え方と景域分類別の推奨色

北海道の道路環境および景観に融和する色彩選定の考え方
>> 道路まわりの道路附属物等について、北海道の道路環境に融和する色彩を適切に選定するにあたり、色の3要素（明度・彩度・色相）をどのように検討すべきかの考え方を取りまとめ。

色彩の「明度」の選定の考え方

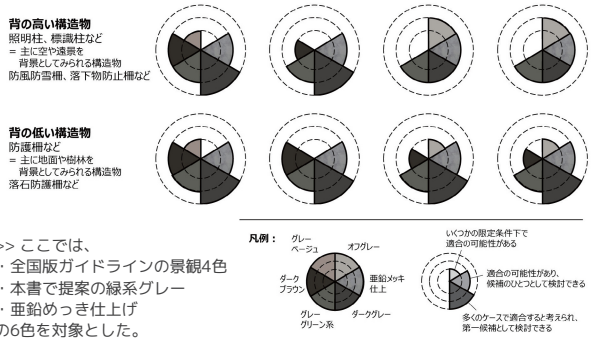


色彩の「彩度」及び「色相」の選定の考え方



北海道における平均的な道路環境を想定した場合の景域分類別の推奨色
>> 北海道における平均的な道路環境を想定し、4つの景域分類別に、どのような色彩を優先的に検討すべきかを整理。

景域分類別 色彩選定チャート ver.1 (参考)



>> ここでは、
・全国版ガイドラインの景観4色
・本書で提案の緑系グレー
・亜鉛めっき仕上げ
の6色を対象とした。

本書の活用方法
- 北海道の道路環境・景観は、本州以南と比較して特異であり、色彩の選定にあたっても独自の考え方で取組む必要があります。
- 特に、慣例等を根拠とした安易なこげ茶（ダークブラウン）の採用は避けるべきことと考えます。
- 多くの現場で、本ポイントブックで整理した考え方をもとに適切な色彩が検討され、採用されるようになることを期待しています。